札幌大学 思い出のコンパ

小林 領子

コロナ禍の続いたこの三年間、人と人とが自由に交流ができなくなり寂しいかぎりです。しかし、残り少ない人生の時を考えると、遠方の友と会い、なつかしい札幌を訪問し、元気のよかった学生時代の気分に少しでも浸れる贅沢があってもいいのではと思います。

昨年コロナ禍の中、集まれる人だけでもと「札幌大学ロシア語学部卒業生の会」が企画した七月七日「七夕コンパ」は、予想を超えて多くの仲間が集い親交を深めました。会では特別なイベントもなくただ集まり、飲み、食べ、話し、和やかで楽しい一時を過ごしました。

終了後、多くの参加者から来年も是非開催してほしいとの希望が寄せられました。席上では参加のK氏が恩師の貝沼・千葉先生などの思い出を感極まって語る姿を見て、参加者の多くが、それぞれの社会的な仕事を終え、自分の自由な時間をやっと手に入れたのだろう、今、まさに過ぎ去った時間を取り戻しているのではないか、との印象を受けました。私も卒業してずいぶん時間が経ってしまいましたが、時々モザイク状ですが学生時代を懐かしく思いだすことがあります。

最近の学生は、私たちの時代とは気質も好みも変わってほとんどこのようなコンパを開催していないと聞きますが、今から五十年前の札幌大学ロシア語学科では毎年、新学期が始まる五月に新入生歓迎コンパ（新歓コンパ）が、卒業式前の二月には追い出しコンパ（追コン）が開催されていました。当時は学生数も多く、開催すると毎回六〇～七〇人ぐらいが一同に集まりました。

新歓コンパは、新たに入学した一年生を歓迎しようと、二年生が実行委員で上級生が前年の新歓時や他の交流時にめぼしい学生数人をマークしお願いしました。実行委員の勧誘は基本的に面談で「前から話がしたいと思って」と軽く近寄り「人柄がいいと評判だよ」「指導力がある」「クラスの人気ものだって」「明るいし仲間に信頼があるそうですね」「ロシア語ができると聞いて」「前からかっこいいと思って、もてるんだって？」「いつもファッショナブルですね」「マドンナの〇〇さんも参加するよ」など相手が乗ってくるような言葉で勧誘し、お願いしましたが、その実態は有無を言わせずコーナーに追いつめ、強制したようなものでした。

実行委員になったメンバーは、まずロシア語の先生に申入れをして、授業開始前に宣伝させてもらったり、先生からも何気なく参加の援護射撃をお願いしたりしました。

実行委員は、チラシ作り、会場設定、会費、動員、司会・会計など運営のすべてをやりましたが、上級生のうるさ型はコンパが近づくと、運営の確認、参加者数の点検をして、少しでも足りないところがあると、すぐに雷がおちて烈火のごとく怒鳴ったものです。

上級生の中には宴会奉行と自他ともに認める熟練者がいて、実行委員にコンパのマニュアルを事前に伝授しましたが、実行委員になった人からはとにかく怖く、緊張し、大変だったと聞いています。しかし、その貴重な経験は実社会に出てから結構役に立ったようです。

「追コン」は三年生が運営、卒業生する四年生に喜んでもらおうと苦心しました。こんなコ

ンパを通して卒業のころには一年から四年生までそれぞれの名前と顔をなんとなく覚え、学内で声をかけるほどになりました。

案内する先生はロシア語の専任のほか、とにかく授業を受けているすべての先生に広く声をかけ、札幌大学以外の非常勤の先生も例外ではありませんでした。コンパの場では授業以外なかなか近づけない、苦手な先生にも何気なく挨拶もできたし、授業では見せない人となりも知ることができました。

一方、会場では人気の女子学生・男子学生のとなりに座ることや近くに席をとるため学生同士の熾烈な闘いがあったとも聞いています。

先生方の中には、お酒もあまりお好きではなく、このような会は苦手で、硬い表情の方もいました。筆者は、その中の一人、いつもポツンと喧噪からはなれている千葉萌一郎先生にコンパの度にお酌をし、挨拶をしました。卒業して数年後の失業中、偶然、大通り公園で千葉先生に出会い、「君はいつもお酌をしてくれた」と感謝されて就職の世話もしていただきました。まったく不思議な縁で「新歓・追」コンのお蔭と感謝しています。だから、今でも宴会で新顔にはまず、先輩や周りの仲間に「お酌」をしてから飲み始めるよう勧めています。この経験を「水源地」第一号に『一杯のお酌が人生を変えた』と千葉先生の思い出を載せさせていただきました。

2019 年　札大ロシア語学科「卒業生の会」渡辺雅司先生を囲んで

コンパはすべて順調に進むわけではありません。司会が乾杯をお願いするべき重鎮の先生を取り違えたり、紹介の順番が違ったりして、一挙に先生間の雰囲気が気まずい状態になったこともあるし、先生紹介でも名前を間違えたり、先生に議論を吹っ掛けたり、お酒の勢いで仲間同士が言い争いになったり、会場の仕切りを破ったり、飲み経験の少ない学生はべろんべろんになって大失態をしてしまうなど、青春の苦い思いは枚挙にいとまがありません。しかし、気になる学生に何気なく話したり、近づいたり、自分を売り込んだり、デートの約束をしたりと、若者にとっては学年を超えた絶好の異性との出会いでもあったようです。

宴もたけなわに至ると、いつも真面目な紳士風の方波見雅夫先生（ロシア一般史）がやおら立ち上がり、カチューシャを披露するといって「カチューシャの唄」という大正時代の演劇トルストイの『復活』でうたわれた歌をボディーアクション交えて歌いだしました。ロシア民謡の「カチューシャ」しか知らない学生はポカーンとしていましたが、年配の先生たちが喜んで拍手喝采していた光景は微笑ましく忘れられません。

昨年の七月七日の「七夕コンパ」の名称は学

生時代の「コンパ」の名称に由来して、若かりし頃を少しでも思い出し、楽しいひと時をともにすごせればと願って決められました。今年も七月七日に「七夕コンパ」を開催する予定です。前回同様、ロシア語学科卒業生にこだわらず、下宿の仲間、クラブ・サークルの連中、家族など多数参加しておおいに盛りあがりましょう。

歌詞『カチューシャの唄』　中山晋平作曲

カチューシャかわいや、わかれのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と
神に願いを（ララ）かけましょうか

カチューシャかわいや　わかれのつらさ
今宵ひと夜に　降る雪の
あすは野山の（ララ）路かくせ

カチューシャかわいや　わかれのつらさ
つらいわかれの　涙のひまに
風は野を吹く（ララ）日はくれる

カチューシャかわいや　わかれのつらさ
せめて又逢う　それまでは
同じ姿で（ララ）いてたもれ

カチューシャかわいや　わかれのつらさ
広い野原を　とぼとぼと
独り出て行く（ララ）あすの旅

＊「カチューシャの唄」作詞については、当初芸術座の島村抱月がすべて訳したが、二番目以降うまくまとまらなかったため、早稲田大学の後輩である相馬御風（そうま　ぎょふう 1883-1950）に二番以降の歌詞をまかせたようだ。（出典　ヤフーより）

追いコン：前列左から 4 人目貝沼先生、6 人目菱沼先生、9 人目千葉先生(？)

盛り上がる学生時代のコンパ